

## 茫茫二十五年

谷 口 茂

(昭和36年修士修了)

もう四半世紀、二十五年がたったのか。厚稿依頼の電話が掛かってきたとき、私の胸をよぎった感慨は、まるで惜春の思いのようなひどく感傷的な気分だった。それは、先生が赴任してこられたのが丁度あの60年安保の年で、当時修士課程の二年生だった私は、さまざまな意味で自分の青春時代との訣別を経験していたからである。それから二十五年、自分は何をしてきたのだろうか。三十にして立ちもせず、四十にして新たに惑い、五十にして天命を知る由もなく、徒らに五十路閻をさま迷っている。この分では六十にして則を越えて、ひどく破廉恥で放埒なことを仕出かさないと限らない。ひょっとすると青年期の諸問題を解決しそこなったのではないか？

まあざっとそんな感懐を一瞬覚えたのだが、大学院を出たあとも、いろいろな機会に先生と話をする機会に恵まれて、その都度なんらかの程度に印象に残る交渉があったのに、真先に思い浮かぶのは、当然といえば当然ながら、やはり学生時代の体験である。

昭和34年4月、私は独文科を留年して受験勉強したおかげで、宗教学科の修士課程に入学することができた。新しい領域の珍らしさに魅かれて、独文科時代とは人が違ったように真面目に出席したが、一番面白かったのは、これも当然のことな

がら、主任教授岸本先生のゼミだった。これには少壮先輩も出かけてきて、年季のうかがわれる鋭い質問をした。柳川さんもその一人だった。ただこの先輩は、質問の仕方が独特だった。確かに質問の内容は厳しいのだが、口調が柔かく、相手を情動的反応へ刺激しない思いやりが感じられた。一発で相手の息の根を止める必殺パンチこそ、およそ学徒たる者の志すべき質問と思いこんでいた私は、この人はよっぽど自己抑制心の強い人だな、と舌を巻いた。というのは、これだけの厳しい質問を思いついたら、私なら鬼の首でも取ったように欣喜雀躍して、相手を遮二無二攻めたてただろうからである。

翌年、柳川さんは柳川先生に変わったが、このやさしい態度は変わらなかった。われわれは若い助教授を与えられたことを、非常に喜んだ。岸本先生も、いい人事でしょうとほくそ笑んでおられた。病気の進行や図書館長職のため、学生と接する機会が少なくなったことを気にしておられたのだろう。そして柳川助教授も、新しい学問的刺激を研究室に吹きこむことを使命と自覚していたらしく、ここにわれわれは宗教社会学の新風に俗することになった。

始めのうち、この風は微風だった。デュルケムの『原初形態』の翻訳本を読み進めながら、われ

われは茶飲み気分で勝手な感想を述べ合った。先生は殆ど発言されず、われわれのお喋りを面白そうに眺めておられた。実はそのとき先生の内面では、ある変化が生じていたのだが、極楽トンボのわれわれは、相変わらず大平楽を謳歌していた。

記憶が定かでないが、パーソンズの理論をめぐる特別ゼミが催されたのは、その翌年の夏休みだったと思う。先生はわれわれの方法論のお粗末さに我慢がなくなったらしい。そのゼミは、文字通り先生の一人舞台で、人が違ったように雄弁かつ熱弁だった。われわれは石のように押し黙って、神経質にカチャカチャ音を立てて黒板にチョークを走らせている先生を見つめていた。われわれが気圧されたのは、難解極まるパーソンズの理論に対してよりも、むしろ先生の突然の変身にびっくりしたからだろう。

それにしてもあの理論体系の難かしかったこと、取りつく島もなく呆然として途方に暮れているわれわれを前にして、先生は当惑してしきりに頭を掻い

ていた。後年、阿部美哉に、「あんときのパーソンズ、判ったかい？」と訊くと、さっぱりだったと笑った。それを聞いて安心した。仲間うちで英語が一番できた阿部にしてこの体たらくでは、こっちがからきしなのは当たり前ではないか。

特別ゼミといえば、ベラ氏を呼んで開かれたのも記憶に鮮やかだ。そのときアメリカ帰りの井門先輩も出席された。先輩がベラ氏と話すのを聞いて、英語がこれぐらいできなければ宗教社会学は理解できないようだなと思い、宗教社会学の勉強を断念することにした。別にそのことだけが原因ではないが、博士課程に入った頃から、私はしだいに宗教学について行けなくなり、古巣の文学ともまた付き合うようになった。そして模索と遍歴の十数年をへて、どうやら宗教と文学の二枚鑑札で渡世する態勢が整った。こうして再び宗教学に復帰した人間を、先生を始め多くの先輩諸氏は暖かく迎え入れて下さった。茫茫二十五年、思えば今更ながらお世話になりっ放しだ。